

留攝南驛。一杯丹釀作重陽。

春日遊大乘寺途上口占

含紫樓主人

菜麦青青々八野村。寺邊有八村。俗云野八村。輕陰霽々弄

晴暄。遊人不復須停杖。直自花間到寺門。

禪關深鎖白雲籠。隔嶺鳥歸紫翠中。香散人

空松院靜。微吹猶恨落花風。

訪麟童和尚座上作。

欲滌紅塵澆來敲古寺。關堂深蒼樹裡僧語

白雲間。花影一泓水。松聲四面山。愛閑借禪

榻。日夕轉忘還。

澹然無色界。不復着浮生。栖鳥已禪意。風林

尚世情。廓虛雲出入。花滿日陰晴。誰識此間

趣。僧分半牀清。

松雲院の藤の花をみてよめる

含紫樓主人

來てみれば法の庭とてむらさきの

雲のたぢひく藤波の花

おのかをまへ子の森の龜より身

の祝にふもしを七つ一うたの中

によみいれてたへといひおこせ

けをばよみて遣しける

けふよりろふしの麓をふみにふめ

雨のふるにも風のふくにも

をりにふせて 硯友會員 閑鷗

根にかへる花ををしとや思ふらむ

わか葉のうれにうぐひすの聲

かへり行く春のうらみや鶯の

音をのみたてゝささふるすなり

春くきてならむる空の夕つく日

のこるも淋し西の山のは

花の色に染めし袂もぬきかへて

けさうらかさし蟬の羽衣

花鳥の色香もけさは夏衣

まろへし春の袖をしるおもふ

閑庭落花

視友會員

氷川

ありとたにしられぬ宿の櫻花

ちるを惜しとや見る人のあき

雨中閑居

世の外の宿のたぐさへさひしきに

はるともわかすあかめくらまつ

夕雲雀

すかの根のあかき春日もあかてあは

鳴くね空ある夕ひはりかモ

更衣

折ふしれうつるあらひはしりつゝも

ぬきもやられぬ花染の袖

松上藤

常盤なる松にかゝりて紫の

雲かどはかり見ゆる藤波

平敦盛

櫻月

白波の立かへらすはかくはかり

あたに碎けて散らさらましを

柳

錦野をふく春風の影見えて

霞にあひく青柳のいと

早梅

鶯もまた冬こもる谷うけに

早くも匂ふ梅の初花

春月朧

春の夜のあはれをこめて玉垂の

柳の糸にけふる月かな

春雨

うら若き柳の糸も打しめり

霞よりふる春の雨かな

雨後新樹

視友會員 受樂院義春

吹風に名残の露をはらはせて

しつく涼しきわか縁かき

雨中棟

梅雨の降るやゆふちの花ちりて

わか紫の露ろこほるゝ

藤溪

江楠

枯葉

水邊螢

中々よもえても影の涼しきは

水きはを照す螢ありけり

雨中時鳥

たちはなの花散里の五月雨に

こゑもかをりてなく郭公

梅薫風

賤う家の手枕近く匂ひ來て

まつ人誘ふ梅の下風

櫻狩

春毎に眺むる人はかはれども

批評

前號雜評

◎巴城子の『青年と教育』 夫れ教育の事たる、頗る哲學上の研究を要するものあるが故に、吾人初學の徒が容易に思議すべきものにあらずと雖ども、受動者の觀察も亦多少の値なきとせず。巴城子が筆を教育のことに着けたるも、其意蓋してゝにあらん、吾が今妄批を試みんと欲するも亦之によりて

平教盛

はぢは昔の色に咲きけり

須摩の浦磯うつ波の荒ければ

浮ひもあへす消ゆるうたかた

題しらす

遠近の花の横雲絶々に

山本うすむ春のあけほの

花間春月

長閑ある霞のころも重ねきて

花とひとしく匂ふ月かあ